

〈原 著〉  
過去11年間の松山赤十字病院歯科  
における矯正患者の統計的観察

やまだ矯正歯科クリニック

山田 哲郎

つか矯正歯科

柄 博治

渡辺矯正歯科

渡辺八十夫

ロイヤル矯正歯科

鶴田 仁史

松山赤十字病院歯科

西川 信吉, 高岡 吟子, 櫻井 裕也

広島大学歯科部歯科矯正学講座

丹根 一夫

キーワード：矯正患者, 統計的観察, 不正咬合

Statistical observation of orthodontic patients  
in the dental clinic, Matsuyama Red Cross Hospital

Tetsuro Yamada

Yamada Orthodontic Office

Hiroharu Tsuka

Tsuka Orthodontic Office

Yasoo Watanabe

Watanabe Orthodontic Office

Hitoshi Tsuruda

Royal Orthodontic Office

Nobuyoshi Nishikawa, Ginko Takaoka, Hiroya Sakurai,

Department of Dentistry, Matsuyama Red Cross Hospital

Kazuo Tanne

Department of Orthodontics, School of Dentistry, Hiroshima University

(Director : Kazuo Tanne)

Key words :

orthodontic patients, statistical observation, malocclusion

連絡先：山田哲郎 やまだ矯正歯科クリニック

〒732 広島市南区猿猴橋町5-12 TEL 082-262-4618

はじめに

松山赤十字病院歯科では、昭和50年より歯科矯正治療を開始し、昭和58年より広島大学歯学部歯科矯正学講座の協力を得て、2週間に1日という限定された診療体制のもとに多くの矯正患者の治療を行ってきた。この間に、昭和53年には矯正歯科の標榜が認められ、また昭和57年には口唇裂口蓋裂患者の矯正治療に健康保険が適用されるなど矯正治療を取り巻く社会情勢は大きく変化してきた。また、ここ数年、松山市内の矯正専門歯科医院数は5医療機関と増加してきた。そこで過去11年間を振り返り、当院歯科における矯正患者の実態調査を行ったので報告する。

調査対象および調査項目

昭和58年4月より平成5年3月までの11年間に松山赤十字病院歯科において矯正治療を開始した患者254名を調査対象とし、以下の項目について調査を行った。

- 1) 初診時年齢, 2) 性別, 3) 初診時年月日, 4) 不正咬合分類, 5) 居住地域, 6) 治療段階。

結果および考察

1. 初診時年齢, 男女比

初診時年齢は6~12歳の学童期の患者が68.5%と全体の2/3以上を占め、8歳がピークを示していた。これは、前歯部の不正咬合が発現し、また、その後の側方歯の交換期に不正が顕著になり、保護者にも不正咬合と認識できる時期に相当するためと思われ、過去の報告<sup>1)2)3)4)</sup>と同じ傾向を示していた。20歳以上の成人患者は9.4%であった。他の報告<sup>3)5)</sup>でも成人患者が1割前後を占め、近年、増加傾向にあると言われている。これは最近の「よりよく生きる」という意識の向上の中で歯列矯正に対する認識の高まり、経済的余裕などが反映されているためと思われる。

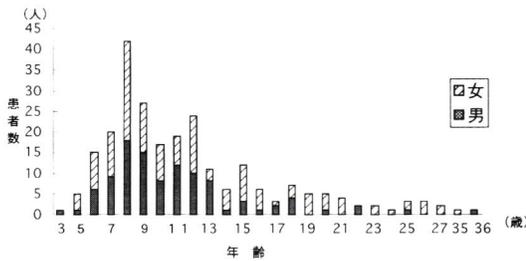


図1. 初診時年齢別患者数

男女別にみると、男子104名、女子150名であり、男女比は男子：女子=1：1.44で、女子が男子よりやや多い程度であった。近年の他の報告<sup>3)5)</sup>でも男子の割合が増加しつつあると言われている。これは本人あるいは保護者の歯列矯正に対する関心が性別を問わず高いことをものがたっているものと思われた。年齢別の男女比をみると年齢により多少の変動はあるものの、上記の傾向と大きく異なるところはみられなかった(図1)。

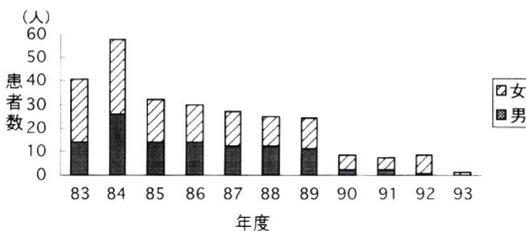


図2. 初診時年度別患者数

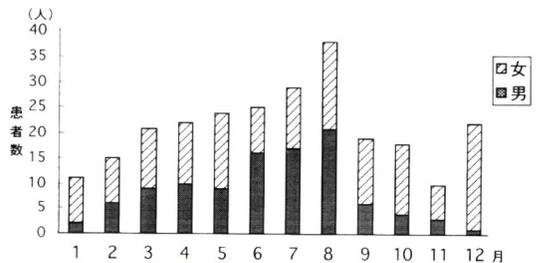


図3. 初診時月別患者数

2. 年度別初診患者数と月別患者数

年度別初診患者数は1983年度、84年度と増加したが、85年度以降はわずかず減少していた。これは84年度までは、治療を希望する患者を全て受け入れていたが、85年度以降は松山市内の矯正専門歯科医院へ紹介することが多くなったため、減少したものと思われた。さらに、90年度以降は口唇裂口蓋裂患者、外科的矯正術を併用する必要のある顎変形症患者などの難症例のみを受け付けたため10名以下と極端な減少を示した(図2)。

月別患者数をもっとも多いのは8月、次いで7月となっており夏期休暇を含めた2ヵ月間に全体の26%が来院していた。このように長期休暇中に初診で来院する患者が多いことは一般的傾向と思われる<sup>3)5)</sup>。逆に1月、2月、11月が

少なかった(図3)。

### 3. 不正咬合分類と割合

#### 1) 不正咬合の分類

不正咬合を①前歯3歯以上が反対咬合を呈するものを下顎前突, ②overjetが5mm以上で口唇の突出感のあるものを上顎前突, ③overjetが5mm未満で上下口唇の突出感のあるものを上下顎前突, ④前3者の症状を伴わず歯列内に叢生がみられるものを叢生歯列, ⑤以上の項目に当てはまらずoverbiteがマイナスのものを開咬, ⑥両側中切歯間に2mm以上の空隙のあるものを正中離開, ⑦口唇裂口蓋裂, ⑧その他の8つに分類した<sup>5)</sup>。

#### 2) 不正咬合別の割合

下顎前突(24.8%), 口唇裂口蓋裂(24.4%), 叢生(21.3%)がほぼ同等の割合で全体の70.5%を占め, 以下, 上顎前突(11.4%), その他(10.2%), 上下顎前突(3.1%), 開咬(2.4%), 正中離開(2.4%)の順であった(図4)。

全患者の中で下顎前突の占める割合は他の医療機関の報告<sup>1)2)3)4)</sup>が30~40%前後なのと比較すると少なかった。口唇裂口蓋裂患者の割合は約24%とかなり少なく, これは広島大学<sup>6)</sup>(10.7%), 九州大学<sup>7)</sup>(10.9%), 愛知学院大学<sup>2)</sup>(10.7%), 奈良県立医科大学<sup>8)</sup>(11%), の2倍以上, 昭和大学<sup>9)</sup>(20%), 川崎医科大学<sup>10)</sup>(22.4%)よりも多かった。このような違いは当該医療機関の立地条件, 診療方針, 他の医療機関との連携などの違いによると思われる。

#### 4. 居住地域と通院距離

松山市内に居住している患者は61.8%, 松山市内以外の愛知県内から通院している患者が37.8%であった。また高

知県から通院する患者が1名あった(図5)。通院距離は10km以内の患者は64.1%で, 10km~20kmの患者が9.1%, 20km以上と遠距離の通院患者が26.8%であった(図6)。

近年, 矯正治療を行う一般歯科医院が増加しているものの, 著しい不正咬合に対してはやはり専門医での治療が勧められること, また, 愛媛県内の矯正歯科専門医院が松山市内に集中しているため, 実際には居住地の近辺で治療を受けにくい患者もあり, 通院距離が10km以上の患者が35.9%とかなり多くなったものと思われた。

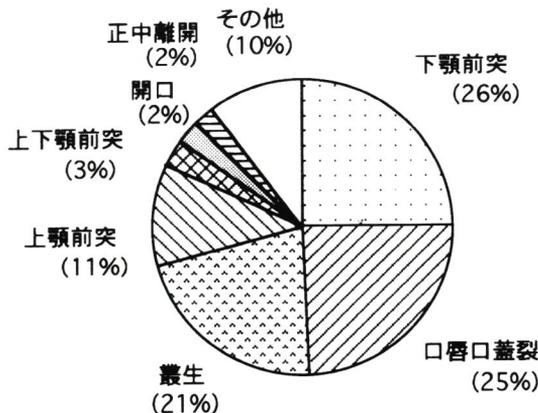


図4. 不正咬合の割合

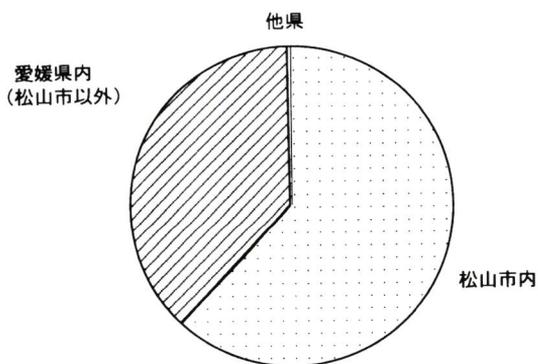


図5. 患者の居住地域

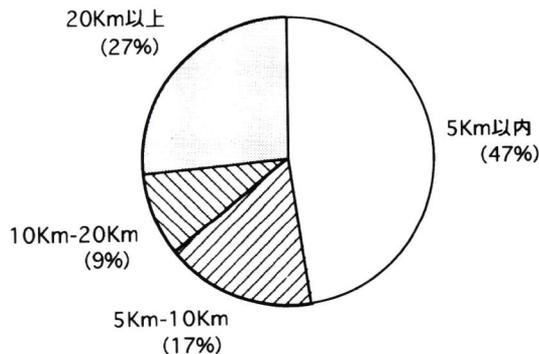


図6. 患者の通院距離

また, 口唇裂口蓋裂, 顎変形症などの患者は口腔外科, 形成外科, 耳鼻咽喉科など他科における治療を矯正治療と平行して受けなければならない場合もある。このような場合, 患者および保護者の時間的, 経済的負担をできるだけ軽減するために各専門分野の治療が同一あるいは近接した医療機関で受けられ, それらに保険適用が認められることが望ましいと考えられる。

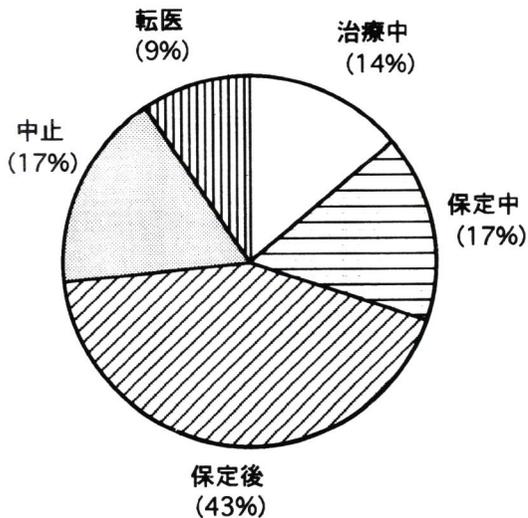


図7. 現在の治療段階

## 5. 現在の治療段階

現在の治療段階は、矯正治療中が全患者の13.8% (35名)、動的矯正治療を終了して保定中あるいは保定を終了した患者が59.4% (151名)、マルチブラケット装置による全永久歯の整列以前に治療を中止した患者が17.3% (44名)、他の医療機関へ転医したものが9.4% (24名)であった(図7)。

動的矯正治療中が全患者の13.8%と極端に少なく、また、他の医療機関へ転医したものが9.4%と多いのは、矯正部門を漸次閉鎖していくこととなったため新しく矯正治療を開始する患者を受け入れていないこと、また、今後1年以上の治療期間を要する患者を転医させた結果と思われる。

最後に、全永久歯の整列以前に治療を中止した患者が17%にもぼっている。これには経済的・時間的理由、矯正治療に対する意識・意欲の問題などさまざまな理由があると思われるが非常に残念なことである。

## ま と め

昭和58年4月より平成5年3月までの11年間に松山赤十字病院歯科において歯科矯正治療を開始した患者について実態調査を行い、次のような結果を得た。

- 11年間の矯正患者は254名で男子104名、女子150名、男女比は1:1.44であった。
- 年度別初診患者数は84年度まで増加したが、85年度以降わずかず減少し、90年度からは初診患者の受付を口唇裂口蓋裂患者と外科的矯正術を併用する必要がある患者のみに限定したため極端に減少した。
- 月別初診患者数は8月、7月が多かった。
- 不正咬合の種類をみると、下顎前突、口唇裂口蓋裂、叢生、上顎前突、その他の順に多かったが、口唇裂口蓋裂が多いことが特徴的であった。
- 患者の居住地は広範な分布を示し、10km以上離れた地域から通院する患者が1/3以上を占めていた。
- 患者の治療段階は、治療後が約60%、治療中が約14%、転医患者が約9%であったが、中止患者が約17%と多かった。

## 参 考 文 献

- 1) 天野昌子, 三浦広行他: 岩手医科大学附属病院矯正歯科開設20年の経過, 日矯歯誌, 46: 687-695, 1987.
- 2) 伊藤率紀, 村田 悟他: 矯正治療受診患者の年代推移に関する実態調査, 近東矯歯誌, 24: 65-72, 1989.
- 3) 中川 真, 香林正治他: 金沢医科大学病院矯正歯科開設後15年間の矯正歯科患者の実態, 近東矯歯誌, 26: 74-78, 1991.
- 4) 坂井哲夫, 田部孝治他: 矯正患者の実態調査 - 初診患者の現在と10年前の比較 -, 広島歯誌, 20: 14-27, 1992.
- 5) 吉野清吉, 石田真奈美他: 広島大学歯学部附属病院矯正科における過去12年間の矯正患者の統計的観察, 中・四矯歯誌, 4: 51-60, 1992.
- 6) 坪倉志乃, 井藤一江他: 広島大学歯学部附属病院矯正科における口唇口蓋裂患者の統計的観察, 日口蓋誌, 15: 132-143, 1990.
- 7) 河野紀美子, 鈴木 陽他: 口唇裂口蓋裂患者の矯正受診と咬合の実態 - 九州大学歯学部附属病院における19年間の統計 -, 日口蓋誌, 14: 159-170, 1989.
- 8) 宮本敬次郎, 木南秀雄他: 過去5年間に奈良県立医科大学附属病院口腔外科に来院した矯正患者の統計的観察,

近東矯歯誌, 23: 31-35, 1988.

- 9) 北林治義, 大塚純正他: 昭和大学歯学部矯正科における開設以来過去3年間の口蓋裂患者の受診状態について, 日口蓋誌, 7: 93-98, 1982.
- 10) 佐藤康守, 林 幸則他: 川崎医科大学附属病院矯正歯科における唇顎口蓋裂患者の受診状態について(その1), 日口蓋誌, 11: 238-248, 1986.

受付 平成7年8月7日